

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	水明インターネット句会（選句・選評） 令和四年十月
稀香	正信 茂一郎	粉雪	喜夫	正信	静香 京子	きいち	しんい 美枝子 風舎 京子	しんい 荒一葉 マスミ ひろし 稀香 きいち		朝香 六弦 正信 はるみ		のり子			
啄まればはらわた曝す烏瓜 象を受ける。 枯木にぶら下がった烏瓜は印象深いが、はらわた曝すでさらに強烈な印象を受ける。	軽やかに渡る吊り橋紅葉狩 楽しい秋の行楽の一角。紅葉狩が慎重に渡りがちなつり橋で足を軽くさせるという表現がいい。	逝く秋や抽斗に文入れしまま 秋も逝くというのに、まだ捨てる勇気がないのですか？	瞑想の枯山水や鴟高音 京の寺なのか座禅中の一瞬を切り取り絵画見たいで素晴らしい。	赤とんぼ紅差し指で引くるルージュ ノスタルジーのある季語と現在の女盛りのアンニユイの取合わせが見事。色々想像させる楽しい一句。	ハロウィーンに抜くや最後の親知らず 先日のドライブでは、確かに曲がるたびに色鮮やかでした。	曲がるたび色鮮やかに紅葉坂 ハロウィーンに託したことが面白い。親知らずを抜き、子供から大人になつたのでしょうか？	名人逝く金木犀のこぼれ花 円楽師匠のことでしようか、残念です。上五から下五の関連性が良い。「名人」に「一金」の取り合わせ、「逝く」と「こぼれ花」の取り合わせが、秀逸で優れた追悼句である。圓楽逝く時事句。こぼれ花とこぼれ話との掛け合わせが良い。	手際良き縄の結び目稲架日和 秋晴れの田園風景が目につかぶ。秋晴れの日の稲架作業、縄目の確かさにその丁寧さが伝わり、今では珍しくなつた景色が目につかぶ。豊作である。収穫した稲を稲架に掛ける。その手際が良く、見ているにも気持ちが良い。きつと美味しのお米ができるだろう。嬉しい秋日和。稲架を結ぶ縄の手際よさに目をつけた。秋の清々しい空のした、収穫した稲を干すお百姓さんの喜びが伝わる。綺麗に揃つた縄の結び目に目を付けたところが大変良いと思います。	偶然の頭上かすめる次郎柿 秋晴れの田園風景が目につかぶ。秋晴れの日の稲架作業、縄目の確かさにその丁寧さが伝わり、今では珍しくなつた景色が目につかぶ。豊作である。収穫した稲を稲架に掛ける。その手際が良く、見ているにも気持ちが良い。きつと美味しのお米ができるだろう。嬉しい秋日和。稲架を結ぶ縄の手際よさに目をつけた。秋の清々しい空のした、収穫した稲を干すお百姓さんの喜びが伝わる。綺麗に揃つた縄の結び目に目を付けたところが大変良いと思います。	それぞれのこととして二人良夜かな 夫婦が自由を尊重している様子が感じられ、季語の明るさが良い。秋の夜の自由な雰囲気が良い。二人別々なことをしていても心は通い合っている。それが良夜。良いですねえ、まさに良夜です。	秋晴のオーブンハウス一戸建て 秋晴の自由な雰囲気が良い。二人別々なことをしていても心は通い合っている。それが良夜。良いですねえ、まさに良夜です。	不可解なほどけぬ絆かぼちや炊く 奇怪な絆が想像を掻き立てる。	秋の雨遺品の中にロキソニン 秋の雨の自由な雰囲気が良い。二人別々なことをしていても心は通い合っている。それが良夜。良いですねえ、まさに良夜です。	竿先に運動会のズック掛け 秋の雨の自由な雰囲気が良い。二人別々なことをしていても心は通い合っている。それが良夜。良いですねえ、まさに良夜です。	
反町修	保坂翔太	青木鶴城	本橋稀香	光雲2	石関六弦	しんい	新暦文	檜鼻ことは	木村るみ子	原洋一	秋谷風舎	古賀由美子	池田瑠子	新井のり子	

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	水明インターネット句会（選句・選評） 令和四年十月
美枝子 稀香 静香		マスミ		朝香	珪子	のり子 珪子	芳春		芳春 はるみ		修		道を	マスミ	
立合ひの音を目にする秋巡業 <small>巡業ならではの様子中七が良い。テレビではわからないじかに相撲観戦をした作者の立ち会いの激しさ見た驚きが伝わる。「音を目にする」成る程。</small>	運動会や地声大きく盛り上がる	山靴の紐むすぶ朝秋惜しむ <small>ろそろ秋山のシーズンも終わる。今年最後となるかもと思いつながら、履き慣れた靴に「よろしくね」と頼みながら紐を結ぶ。</small>	栗名月カーラジオからクラシック	実柘榴や野生の哮る老鴉 <small>赤く割れた柘榴の実と老鴉の野生、素晴らしい取り合わせですね。</small>	縁側の甕一杯の芒かな <small>これだけで充分様々な情景が伝わります。</small>	新しき齒ブラシ立てて神無月 <small>名月の美を齒ブラシで際立たせるとは。清潔感があり、爽やかな句。</small>	秋の暮最中にそろり手が伸びて <small>「そろり」が効いています。</small>	晩秋の伊豆の山々朱に染まる	雲の波引いてはじまる十三夜 <small>今年の十三夜は、まさにこうでした。中七から下五にかけていよいよ始まる舞台を観ている様な吸い込まれますね。</small>	落花生ときどきつまみテレワーク	秋風やうなじを晒す束ね髪 <small>健康的な色つぼさが魅力。</small>	晩秋や一途に深む空の青	半端ないぶつちやけやばい秋の晴 <small>新語をいち早く取り入れようとするチャレンジ精神に一票。</small>	単線のホームの下に野紺菊 <small>郊外を走る単線。運行本数も乗降客も少ないホーム。ふと目をやると、野紺菊が咲いている。作者の小さな幸せが伝わってくる。</small>	
岡田芳春	宮崎チアキ	渋谷きいち	丸山茂一郎	森美枝子	後記朝香	霜里	望月のぞみ	岡本たか子	ほのる	俳爺	龍野ひろし	後藤允孝	網野月を	倉田詩子	

45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	水明インターネット句会（選句・選評） 令和四年十月
	のぞみ	翔太	るみ子	道を		光雲 俊晴			粉雪		ことは きいち	允孝	曆文 由美子 荒葉 光雲2 俳翁 ひろし 粉雪 ほのる 六弦 鶴城	ひろし 風舎	
鉄塔の椋鳥一羽けふ一日	鰯雲あいだに見える空の道 <small>ロマンが溢れている。</small>	秋の川メツカへ膝折る大男 <small>どこにいてもイスラム教徒は1日5回の礼拝を欠かさないと。その様子が具体的に描かれている。</small>	別の顔今宵は楽しハロウイーン <small>心情が伝わる。</small>	ジーンズの膝の破れや芋の秋 <small>季語の選択が良い。</small>	友や逝く見送る肩に秋の雨	明日までと賞味期限の鵓の贅 <small>賞味期限と鵓の贅が響き合っている。いいですね。賞味期限などないはずの鵓の贅に「明日まで」と言ったところが面白い。</small>	風の朝ひっそり咲きし断腸花	惜別や紅葉かつ散る宵の口	女王逝く朱の濃き秋のゼラニウム <small>まさに、朱の女王でした。</small>	子供らに人権の花文化の日	小春日や腹にやさしき伊勢うどん <small>小春日の伊勢参り。参拝のあとは、てこね寿司と伊勢うどん。赤福はお土産に。厳しい寒さの前の穏やかな一日には腹に優しいうどんが一番、これで乗りきれ。</small>	老いてなほ学びを探る夜寒かな	頬杖の秋思の一指観世音 <small>老いてなお勉強を食えるこの執念が良いですね。下五の夜寒かながきいています。</small>	観覧車の灯りとだへて虫のこゑ <small>観覧車の灯も消えあとは虫の声だけ。「灯りとだへて」がよい、時間の経過と深まりが感じられる秀句である。</small>	
新井のり子	古賀由美子	池田瑠子	山中いちい	河野はるみ	奥山粉雪	持永喜夫	井口俊晴	野田静香	小林京子	日高道を	染谷正信	寒立馬	丸山マズミ	立野音思	

60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	水明インターネット句会（選句・選評） 令和四年十月
修	いちいるみ子	のぞみはるみ	暦文喜夫	翔太		俊晴翔太	俊晴茂一郎		珪子静香	允孝ほのる	由美子	風舎京子			
新宿の空占扱せし稲光 スケールの大きい写生句。	幼子の掌の温もりや秋の浜 秋の浜のひやりとした空気が感じられる。中句が良い。	大根蓮根風邪ひいてコンコンコン 「ボーイソプラノ」と「秋桜」の取り合わせがよい。爽やかに、歌声が風に乗っていく景が、浮かんでくる。秋桜の軽やかな様子とボーイソプラノの調べの取り合わせが新鮮。	陶工の悠悠自適みのこづち はいはい、どうぞ重ね着をして温かくして、お大事に。最高です。	新酒さげはるばる来たる旧き友 酒好きの友がいて、酒好きの自分がいる。「新酒さげ」が秀逸。	老農婦寂し今年限りの芋畑 季語がぴつたり。イノコヅチの花言葉命燃え尽きるまでと悠々自適の取り合わせがいいですね。	幾何が好き代数も好き秋の夜 秋の夜に幾何や台数を楽しむなんて、数学嫌いの私には全く信じられないですね。灯火親しむ秋の夜、といっても勉強。数学好きの高校生を連想させる。	いくつかの地蔵に出会ひ茸狩 茸狩りをするような場所には、お地蔵さまが立っいていそう。茸狩の時に お地蔵様を発見する喜びに共感。	秋蝶やまとふ瑠璃紺夜会服	喧騒を子等に預けて那須の秋 お気持ち良く分かります。充分静養なさって笑顔でお帰り下さい。喧騒から逃れて、秋を満喫が良い。	金婚の旅寝のひと夜虫の秋 結婚50年の記念旅行いいですね。下五の虫の秋が際立っています。上五中七がしみじみ季語と響きあいます。	袖編みて仕上げ楽しむ夜なべかな なんだかとても楽しそうです。長い夜をワクワクで過ごしてる。	風に乗るボーイソプラノ秋桜	秋空やバイク群がる道の駅	月白や藤井聡太のしなる指	
龍野ひろし	倉田詩子	網野月を	保坂翔太	反町修	本橋稀香	青木鶴城	石関六弦	光雲2	新暦文	しんい	木村るみ子	檜鼻ことは	秋谷風舎	原洋一	

75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	水明インターネット句会（選句・選評） 令和四年十月
喜夫			美枝子 ほのる 六弦 鶴城	のぞみ			荒一葉		俳爺 るみ子	のり子 芳春	ことは	しんい 允孝 いちい	ことは 由美子 いちい		
残生は清く貧しく柿紅葉 <small>柿紅葉の赤が残り的人生を清貧に生きられたらとの思い素敵です。</small>	川沿いに子等の影きえ柳散る	吾が為の地道な走り秋うらら	秋の夜や声音を変へて読む絵本 <small>最近は大人数向けの絵本もあるとか。具体的な描写が秋の夜をほんのり温かくしています。親子の笑顔が見える心温まる良句です。秋の夜の絵本の読み聞かせはより味わいが深いのでしょうか。</small>	待たされし美男さんまど見つめ合ひ	夜泣き子に背ぬくもり十三夜	賑はひは遠く廃墟の十三夜	零余子飯おかず不要の三杯目 <small>い</small>	晩秋や靴ゴールドに履き替えて	店先のほうじ茶の香や秋深し <small>このほうじ茶は深蒸しでしょう。季語が効いていると思います。季語と合う。</small>	あり余る木犀の香とバスを待つ <small>気負わない日常描写がいい。濃厚な金木犀の香り、上五の表現から伝わりました。</small>	「考える人」のほぼづへ秋思ふ <small>まさに秋思の姿ですね。</small>	落日の朱の極みもて冬紅葉 <small>秋の照紅葉よりも美しさは冬紅葉に軍配がある。落ちる夕映えに赤く染まる「ナナカマド」は見応えがあります。感動が伝わる形容。</small>	留袖の金糸銀糸や秋澄めり <small>良き日となりましたね。おめでとうございます。秋のきらめき光がこぼれてくるようなイメージです。留袖の渋い豪華さが秋らしい。</small>	踏み込める畔の一步や飛ぶ飛蝗	
染谷正信	寒立馬	宮崎チアキ	立野音思	岡田芳春	森美枝子	渋谷きいち	丸山茂一郎	望月のぞみ	後記朝香	霜里	俳爺	岡本たか子	ほのる	後藤允孝	

						84	83	82	81	80	79	78	77	76	水明インターネット句会（選句・選評） 令和四年十月
							曆文 修 俳翁 朝香 鶴城 茂一郎				道を		光雲2		
						古里のはぎ掛け俣ぶ七十路や	ランナーを釣瓶落としが追いかける <small>落日前にランナーがゴールできるかスリルがある。釣瓶落としがランナーを追いかけるという措辞に脱帽です。季語の釣瓶落としが効いています。ランナーと釣瓶落としとの競争、発想が面白い。あつという間に暗くなる夕刻の表現がうまい。</small>	外灯の電球取り替へ末の秋	頬杖をつけば身に入む海の風	長き夜や友の相槌「もう」と「未だ」	物の怪は銀木犀と連れ立ちて <small>物の怪と銀木犀の取合わせの妙。</small>	秋をしむ土地の古老の独り言	街騒（まちざい）にゐて旅を恋ふ十三夜 <small>破調でもリズム感がいいです。</small>	鬚乱れ負けて絵になる人気力士	
						奥山粉雪	山中いちい	河野はるみ	野田静香	持永喜夫	井口俊晴	日高道を	丸山マスキ	小林京子	